

The
Boogeyman
boogie

Akino

「やめてよ……どうしてこんなこと……」

どうして？ どうして僕が今こんなことをしていると思うんだ。

「何言ってるの？ 私、あんたに何かした？」

本当に分からないのか？

僕には分かる。あんたのことは何もかも。

「痛い！」

あんただってそうだろう？ 僕のことを全部分かっているから……だからそうやって何も言えないんだ。

「嫌！」

否定しないんだな。はっ！ 当然か。非の打ち所のない完全完璧な姉。対して僕はどうか？ ……僕には何も無い。何も。何も！

そりゃ底の浅い井戸を見通すのは簡単だろうさ！

「痛い！ やめて！」

毎日毎日、出来のいい姉と比べ続けられる生活。

出来損ないの欠陥品に生きる価値なんてない。親ですらそう思っているのが分かる。

そんな奴らがこの僕を作り出した。

ああ！ あんたもその一人だ！

もううんざりなんだよクソツたれ。

ほら！ 止められるなら止めてみろよ！

「もうやめて……痛いわ……」

毎日毎日感じる悪意の存在に吐き気がする。

憐憫の視線に気が狂いそうになる。

「嘘、でしょ……？」

僕は自由になりたいだけなのに。

「ねえ……そんなのやめて……」

じゃあどうする？

僕はどうする？

「い……や……」

ああ。

なんだ。

簡単じゃないか。

殺せばいい。

—アメリア？

「……え？ な、何かしら？」

—どうしたんだいポーっとして。

「ごめんなさい。なんでもないわ、続けて」

—その時、君は彼の近くに？

「近く？ 近くどころじゃないわ！ 私はずっと隣にいたのよ！ 彼から最期まで見ているよう命令されてね！」

—落ち着いて。君は最初から彼を知っていたのかい？

「あ……ごめんなさい、私……あの時の光景を思い出したら怖くなっちゃって。いいえ、あの日が初対面よ。口うるさい弟から逃げて、学校の中庭で図書室から借りてきた本を読んでいたら、突然声を掛けられたの。『君もキングが好きなのかい？』って」

—^{キング}王様？

「^{怪奇小説の王様}スティーブン・キングよ」

—ふうん。それで？ 君たちはそれから？

「あなたは本を読まないのね、がっかり。……しばらくの間は好きな作家なんかについておしゃべりしていたわ。彼、凄い数の本を読んでいたのよ！ キングもいいけれど、最近の流行りはディーヴァーだって（『スリーピングドール』はとても面白かったわ！）言っていたわ。それから、彼が場所を変えたいって言ったから食堂に移動したの。鍵が掛かっていたから、私が鍵を借りに行ったわ。先生には人がいない所で勉強したいからって言って。私がいつも学校に来て、真面目に勉強したり本を読んだりしているのを知っていたから、先生はすんなり貸してくれたわ」

—なんでまた、わざわざ鍵の掛かった食堂なんかに？

「さあ？ でも、彼、随分焦っているみたいだった。食堂に入ってからずっとそわそわして……」

—アメリア、君は不審に思わなかったのかい？ いきなり知らない男に食堂に行こうなんて言われて。

「それは……少しは変だと思ったわ。私は……ほら、見ての通り美人じゃないし、男の人に声を掛けられたことなんてないもの。でも……」

—でも？

「あなたも分かるでしょ？ 男の人って、好きでもない女の子とでも、その……ご無沙汰だったりすれば」

—ああ、そういう期待を込めてついて行ったんだね。

「そ、そんな馬鹿にしたように言わないで！ 確かに私は可愛くないけど……年頃の女の子なんだから！」

—ああ、ごめんよアメリア、そんなつもりはなかったんだ。許して欲しい。

「……彼は毎日トレーニングをしていたそうだからとっても筋肉質で、本にも詳しくて、優しくて、それにちょっと子供っぽい顔つきだったけどかっこ良かったし……そんな男の人から鍵の掛かった誰も来ない場所に誘われたら、誰だって期待するでしょう？ 少なくとも、私の知り合いはみんな、期待する方に百ドル賭けるわ！」

—分かったから、続きを話して。

「入り口の鍵を閉めて椅子の一つに腰掛けるなり、彼は急に人が変わったように乱暴な口調になってこう言ったわ。『鏡を持ってこい！ 更衣室にある鏡だ！』って。訳が分からず私が呆然としていると、拳でテーブルを叩いて彼、ものすごい勢いで怒り出したのよ！ 『早く持って来い！』ってね。……殺されるかと思ったわ」

—鏡。

「びくびくしながら、食堂から繋がっている更衣室に行ってみたら、確かに私の背丈くらいある姿見が置いてあったわ。壁の鏡が掛かっていた跡の前に置いてあったから、誰かが割った鏡の代わりに置いたんでしょう。ほら、みんな更衣室じゃ自分のスマートな体を見たがるものじゃない？ 私には必要ないものだけど……でも、私だって可愛い服を着てお洒落な靴でも履いたら少しは——」

—アメリア。

「あ！ ごめんなさい。私ったらまた……」

—それで？

「キャスターなんてついていない鏡だったからもう大変よ。重くて持てやしないし……結局一生懸命引き摺って、やっと彼の所に運んで行ったの」

—その時に逃げられたんじゃないのかい？

「怖かったのよ。怒った時の彼、なんだか普通じゃないくらい目をギラギラさせて……逃げたらどこまでも追いかけてきそうで……」

——本当にそれだけかい？

「……何が言いたいのか？」

——アメリア、君はその日初めて会った彼とのことを、まるで恋人との昔話みたいに語るんだね。

「え？ ……ええ、そうかもしれないわ。どこか彼とは共通するものを感じたから」

——君が？

「そうよ！ 悪い？ 勿論、彼みたいに格好いい人と私みたいな女が似ているというのもおこがましい話だけれど、彼は他人とは思えないの。どうしてかしら……」

——不思議だね。

「本当に不思議。あの時、彼はどうして私を選んだのかしら？ 確かに私はあの時一人だったけど、他にも一人にいる子は何人もいたのに」

——違うよ。アメリア、君のことさ。

「私？」

——どうして君は、どこか彼を庇うようなことを言うんだい？

「だって彼は……」

——彼は人を、殺したんだよ？

暑い。

季節は巡っているとはいえ、世間一般の暦では今はまだ夏だ、そりゃ暑いのは仕方がない。

頭では分かっている、おいおい、ここは食堂だろう。何故冷房をつけない？ と、そこまで考えて、額を流れる汗と共に盛大な溜め息を吐く。そりゃあ休みだからに決まっているだろうがくそつたれ。

8月も終わりに近付き、大学も広義的には夏休みという、宿題も試験もない長期休暇の真っ只中だが、学校内では当然サマースクールも行われている。秋の新学期——新年度のくだらないお勉強についていく為のお勉強ってことだ。或いは何も考えず遊び惚けて単脳無しのガキ共への救済措置か。位が危ない

いずれにせよこんな時期に学校にいるのは、自発的かどうかに関わらず、その殆どが勉強って名前の鎖にがんじがらめにされてる可愛そうな奴ばかりってことだ。

天井まで伸びた背の高い窓ガラスの向こう側には、暑さで頭が逝っちまってるようにしか見えない^{workaholic}ガリ勉君の姿がちらほら見える。やれやれ。学生の本分は勉学とはいえ、夏休みにしか得られない、教科書の中には書いていない貴重な経験もあるだろうに。……まあ、かく言う俺にはそんな経験をした記憶は微塵もないが。

口癖になって長い付き合いの台詞を溜息と共に吐き出しながら、同じ物が世の食堂にはごまんとあるだろう、座っている椅子のカーブになっている背もたれに沿って、俺は凝り固まった背中をぼきぼきと伸ばす。まだ昼過ぎだというのに非常に疲れていた。

夏休みに合わせ、鍵の掛かっていたこの場所をさっき開放して貰ったばかりなのだが、それにしても予想以上に暑い。ネクタイ無しのYシャツがびっちり肌へはりつき、外にいた時よりも汗のかき具合をアピールしている。コンクリートの灰色の食堂は一見涼しそうだが、丁度午後の陽射しを受ける側一面にガラスがあるので、残暑の厳しいサンライトを受けて、室内は完全に蒸し風呂と化している。設計ミスではないかとさえ思えるが、今は窓を開ける訳にもいかない。学校って奴には、来るたびに噂の種を箱買いしていく熱心なミレー^{種まく人}が最低十人はいるからだ。

奴らは自分の周囲に種をばら蒔くだけだが、そこから芽が出てたわわに実ると、何も知らない別な人間が、落ちた種を拾って無意識のうちにまた自分の周囲に蒔く。噂には尾ひれも背ひれも胸ひれまでついて、最終的に当事者の耳に入るころには、どれが真実なのかさえも分からなくなってしまう……やれやれ。だからこの年頃のガキは嫌いだ。

だから俺はここに来た。首も逸らして、上下逆さまになった世界をぐるりと見渡すが、この20ヤード四方の大学食堂内には俺以外のホモサピエンスは存在していない。

ん？ あ、いや、違った違った。食堂を開けて貰ったのは本当だが、まだお帰り願ってはいない。つまり二足歩行の言語を話せる霊長類はもう一人いたようだ。

似合わない化粧と度の強い黒縁眼鏡の向こうに様々なネガティブ思考を内包した、お世辞にも美人とはいえない面長の女。喪服みたいに地味なダークカラーのTシャツにどこにでも売っているような安っぽいジーンズ。飾り気も色気もこれといった特色もない焦げ茶色のポブ。常におどおどして周りの目を気にする^{コンプレックス}劣等感の塊のような、背の低い女子生徒。

ああ、名前は知らない。中庭で暇そうに本を読んでいた——そう、確かスティーブン・キングの『アンダー・ザ・ドーム』。あれは久々の傑作だった——から、ちょっと「お願い、して、食堂の鍵を借りてこさせたのだ。

この手の女は単純でいい。引っ込み思案で内向的だが、その裏側じゃあ絶え間ない願望（欲望ともいう）が、かき混ぜられたシリアルみたいに浮いたり沈んだりしながら渦巻いている。なら、あとはそれを優しく銀のスプーンで掬い上げてやればいい。

やあキミ。一人？ 友達は？ ふうん、本が好きな？ ああ僕もさ！

やれやれ。

日頃から男に声を掛けられる機会などそうはなさそうな容姿と態度。日常的に、体の周りに言外の防御壁を張り巡らしているような女は、一度壁の中に入ってしまう後は簡単だ。ミルクを与えてそれを相手がべろりと平らげたなら、あっという間に尻尾を振って何でも言うことを聞いてくれるワンちゃんの出来上がりだ。

そんな今日の忠犬は、どうやら俺の頼んだ物を持ってきてくれたようだった。胸も尻も凹凸のない筋張った貧相な矮躯で、足取りはよたよたと危なっかしかったが、なんとか俺の所まで運び終わった。

「ありがとう」

椅子から立ち上がり、俺の目を見上げる女子生徒に向き直って素直に礼を言う。彼女は酷く驚いた顔をしたが、さすがに心外だ。警察官なんて似合わないと言われてる俺だって、中身は真っ当な人間。相手に礼の一つくらい、そりゃ

あ言える。

警察官。そう警察官だ。

毎朝のトレーニングは欠かさないし、二日に一回は射撃訓練だってしている。正義感はそのいらのキャプテンアメリカにだって負けはしない。悪を挫いて弱きを助けるスーパーヒーロー……のように現実はそう上手くいかないことは重々承知だが、俺という存在がいるだけでこの町の治安が少しだけでも良くなっていると思えば、縁の下の力持ちというポジションも悪くはない。

もっとも、感謝されるより疎まれる方が多いのも、また事実だが。

「これで……いいんでしょうか？」

神経質そうに眼鏡を弄びながら、息を切らしたまま女子生徒は言った。声を掛けたときの、あの舞い上がったような表情はなりを潜め、今では視線をそわそわと左右に行ったり来たりさせながら、時折俺の方を不安そうに見る。考えるまでもなく典型的なストレスサインだ。

俺は汗ばんだYシャツの胸ポケットから、なるべく優しそうな表情を選んで引っ張り出すと、こっちのストレスは悟られないように素早く顔に貼り付けた。意思とは反対の表情に一瞬頬が引きつりかけたが、瞬時に分厚くパテを塗って本音を覆い隠す。相手の心理を掌握したいなら、相手に自分を観察させる時間を与えてはならない。

俺は彼女に仮面の笑顔で言った。

「じゃあ最後にもう一つ……いや、二つだけ頼まれてくれないかな？」

さて、目の前のテーブルには、彼女に頼んで淹れて貰ったインスタントコーヒーの紙コップが人数分置かれ、さらにその向こうには沈痛な表情をした少年の顔がある。名前も知らない彼女は不思議な顔で俺の横に腕組みをして立っている。

沈黙に耐え切れず、正面の少年がちびりとコーヒーを啜る。俺も一口だけ手を付けた。

うえっ。酷い酸味だ。予想通り不味い。それになんだこの馬鹿みたいに甘い泥水は？ これでもコーヒーか。俺はコーヒーは毎朝キリマンジャロの挽きたてをブラックでと決めているのに。

やれやれ、こんな砂糖水を飲み続けていたら、いつか頭の中にカビが生えちまいそうだ。

カップの中の黒い砂糖水を、キョロキョロとせわしなく視線を動かしているクソ女に鼻から飲ませてやりたい衝動を必死に押さえつけながら、椅子に深く座り直す。蟻の餌みみたいなコーヒーをテーブルに戻して気分を切り替えると、単刀直入に切り出した。

「言いたいことはあるか？」

「ああ」

俺がきつと睨みを効かせて顔を寄せると、猫背の少年も身を乗り出し、意外にもすんなりと、コーヒーを置いた方とは反対の手の平を差し出した。

「僕が殺した。この手で、殺した」

その声ははきはきとしていて、丸まった背中と口にした内容を除けば、面接に臨む学生そのものだった。

俺がこの事件を知ったのは、今朝方のことだ。

大学のアイドルが殺された――。

簡潔に纏めるなら、そういうことだった。

大学に通っていた女が、自宅のベッドの上にパソコンのコードで縛り付けられ、アーチェリーの矢で胸を五箇所も射抜かれて、血まみれで死んでいるのが発見された。

被害者の名前はジェイミー・シンプソン。明るく活発で、人当たりも良く、おまけにグラマラスで美人。スポーツも勉強も得意だったのだからまさに完璧な優等生だ。凶器のアーチェリーは、彼女自身の持ち物だった。

もちろん学校のバカな男共がそんな学校のアイドルを放っておくはずもなく、いつも彼女の周りにはむさくるしい長蛇の列ができていた。

彼女の亡骸の近くに封の切られた避妊具が落ちていたり、豊満な胸元がはだけ、着衣が乱れて所々痣になっていたりしていたことから、警察はストーカーや男性との交友関係を真っ先に洗うことにした。容疑は強姦殺人という訳だ。

美人の女って奴は、いつでも自分が一番じゃないと気が済まない。いつも沢山の視線を驚嘆みにして、故意かどうかに関わらず汗と整髪料と清汗スプレーの臭いをぷんぷんさせた黒山^{ボーイズ}を周りにはべらしていたのなら、熱を上げた男子生徒の一人が、衝動的な殺意に取り憑かれて矢を射ったと考えるのが、まあ自然だし普通だからだ。

こんな例え話がある。あるところに一人の男に恋する乙女がいた……いや、乙女なんて生易しい呼び方はやめよう。あるところに、狂気に取り付かれた殺人犯がいた。

そう、殺人犯だ。

そいつは男に言い寄る女を片っ端から殺してまわった。そしてその体から切り取ったパーツを男に送りつけていった――宅急便で。

そうすればいつか自分を見てくれるとでも思ったのか……まったく馬鹿な話だ。男は至って普通の男で、特殊な性癖なんてなかった。そんな男が目やら鼻やらを送ってくる相手……まして同姓に惹かれるはずがないだろう？

つまり俺は、早い段階で被害者に熱を上げていた女子生徒がいなかったかどうか聞き込みすることにした。今時同性愛者なんて、怪獣の胃袋みたいに巨大なこの国の中じゃあ大して珍しくもない。コンドームなんて所詮は単純なミスリードに決まっている。頭の固いハイウェイ^{州警察}・パトロールならともかく、地道な足での聞き込みを使命と思っているらしい現地の犬^{PO}共ならもうとっくに周囲に男の出入りなんか無かったことを突き止めているだろう。

他人にばれないように必死に抱えている秘密なんて、誰にだって一つや二つあるものだ。だが、周囲がその秘密を知っていて黙っているということも少なくはない。本人だけが気付かれていないと思って、必死に隠し続けようとしている訳だ。これを滑稽と言わずになんと言う？

おっと、話が逸れたか。

俺は聞き込みをするうちに、その線――同性愛絡みは薄いということに気がついた。先にも言ったが、被害者は大学のアイドルだ。その偶像崇拜っぷりは大したもの、仲の良かった何人かの女子生徒に聞いたところ、被害者は恋愛感情なんて飛び越えた場所にいる存在なのだという。つまり、『好きになるなんて畏れ多い』ということだった。中には友達でも申し訳ないなんて自分を卑下する女もいて、ぶん殴ってその根性を叩きなおしてやろうかとも思ったが、捜査中ということもあり自制した。今そいつが同じことを言ったら俺は間違いなく、この目の前に置かれた熱々のコーヒーを顔にかけているだろう。

やれやれ、なんというか。被害者は女子生徒の中ではどうやら神格化しちまっているらしい。神を殺そうと考えるのはただの馬鹿か、よっぽど狂った人間だけだ。そして後者は大概、自分だけは神様よりも特別だと思っていることが多い。

……トイレットペーパーの一つですら、買ってこなきゃ使えないくせに。

俺は聞き込み対象を被害者周辺の男子生徒に絞った。

恋は盲目。人の目を奪う。

冷静な思考を妨げられ、熱に浮かされた人間は、時として常識では考えられない行動に出る。殺意なんて案外簡単に――そう。風船を膨らますくらい簡単に――膨れ上がるものだ。そして、風船は簡単に、膨らますよりも圧倒的に簡単に、割れる。

だが、こちらも結果からいくと外れだった。理由は概ね女子生徒と同じ。『近くにいられるだけでいい』、『眺めたい』、『自分じゃ吊り合わない』エトセトラ、エトセトラ、エトセトラ。完璧過ぎる人間は、どうやら人としてす

ら扱って貰えないようだ。それが幸せなのかどうかは、俺には一生分からないだろう。

神なんてもんは信じちゃいないが、かのイエス・キリストもこんな扱いをされていたのだろうか。信じる者は救われる。なら信じられる者はどうだ？ ……やれやれ、皮肉なものだ。

ともあれ、教授や用務員のぼあさんにまで話を聞いてはみたが、殺される程の理由があるとはとても思えなかった。そもそも事件が起きたのは今朝。つまりまだ学校は夏休みだ。事件自体を知っている人間すら俺が話すまで殆どいなかったのに、一体誰が彼女を殺したというのか。

次に考えたのは自殺の可能性だ。

死因が、アーチェリーの矢が胸を貫いたことによるショック死だったこともあり、自殺はないだろうと始めは思っていたのだが、例えばトリックを使えば自分を射ることは……難しいにしても出来なくはない。

昔見た推理マンガでは、被害者は自分でベッドサイドにクロスボウと時限式の細工を仕掛け、自分で自分に手錠を掛け、睡眠薬を飲んで眠りについた。時間になれば自動的に矢が射られ、心臓を貫く仕掛けだ。後で協力者がトリックに使った弩を回収すれば、死亡推定時刻と協力者のアリバイ工作になり、存在しない外部犯の犯行に見せかけることができる。

だが、確かこの被害者は自分が死ぬことで、保険金を家族に残そうとしていた。今回の被害者——未来ある若者が、わざわざそんな回りくどい自殺方法を取るとは思えない。

統計的に見ても、若年層の自殺要因は衝動的な理由が多いのだ。彼氏に振られた、就職に失敗した、下手すればテストの点数が悪かった、もっと極端になると、アニメのキャラクターが死んだからショックで自殺した……なんて冗談のような本当の話もあるのだ。やれやれ、これじゃあくソ老人世代が世も末だというのも何となく分かる気がする。これで隕石でも降ってきた日には、頭のつるりと剥げた石油掘りのおっさんたちが隕石を爆破してくれる前に、若者はみんなビルの屋上から身を降らすんじゃないか？

と、余計なおしゃべりだったな。要するに何が言いたいのかっていえば、自殺するならアーチェリーなんてややこしい死に方をするはずがないってことだ。どの家庭にもナイフの一本や二本あるだろうし、リストカットが怖いなら睡眠薬の過剰摂取だとか、ハイウェイに飛び込むだとか、まあ死に方は一つじゃない。ともすれば、クローゼットの角に頭を強く打ち付けるだけで、人間は簡単に死ぬ。

それに、もし被害者がアーチェリーでの自殺にこだわっていたとしても五本は欲張り過ぎだろう。

よって本人だけによる自殺はまずないと俺は判断した。色々言ってはみたが、基本的に人を殺す意思——殺意なんて、単純で幼稚なことが多いのだ。トリックなんて、所詮は推理小説を盛り上げるためだけの小道具に過ぎない。

現実の殺意は真っ直ぐ相手に向かうのだから。

時間差、密室、すり替わり、供述、双子。

名探偵？ 連続殺人鬼？ 雪山？ 孤島？

この中の一体どれだけを知っている。

どれだけのトリックを現実^{タートルズ}に知っている？

そんなもの、ミステリーの中だけでいい。

俺が追っているのは殺人事件だ。血肉が通った人間が一人、殺された事件だ。

確かにまだ、誰かが自殺を幫助したという可能性もある。この場合正しくは殺人事件だが、そうすると、被害者には取り巻きとは違う、もっと近い距離の親しい友人がいたことになる。だが、そんな人間がいたのであれば、警察の聞き込みで名前が浮かんでこないのはおかしい。なら残る可能性は何だ？

身内だ。

そこで俺は、ようやく引っ張り出せた彼女の弟にも話を聞いてみることにした。

ココ・シン普森。十九歳。痩せてはおらず多少筋肉は付いているようだが、それ以外は姉と違ってこれといった特徴も魅力もない、ニキビとそばかすだらけの、ごくごく普通の少年。友達は少なく、いつも部屋で本ばかり読んでいる…
…本当に同じ親の遺伝子を受け継いでいるのかと疑わざるを得ない、典型的な引き籠もり^{タートルズ}。

そして、姉殺しの犯人だった。

「僕は、姉が嫌いだった」

「いつもいつも、姉は僕を見下していた」

「ああ、ずっと考えていたさ。どうやって殺してやろうかって」

先程から口を開いているのは、猫背の少年——ココだけだ。

問い詰めるまでもなく、驚くほどあっさり口を割り、先程から自分が姉を殺した理由をつらつらと述べている。やれやれ。

時々俺がコーヒーに手を付けると、思い出したようにこいつも不味い砂糖コーヒーを啜るが、それ以外は俺の同情でも誘おうというのか、テーブルにつかんばかりに低い姿勢から上目遣いにこっちを見てくる。

「優秀な姉、凡人の弟。それだけでほら、あんたも殺したくなる気持ちが分かるだろう？」

時折まるで自分が宣教師か何かであるかのように、身振り手振りも交えて力説する少年。

虫唾が走る。

こいつが同意を求めると俺に聞く度に、俺の中でぐらぐらと煮え立つ油みたいな何かが、今にも縁からこぼれ出しそうになる。クソツたれ。

結局自殺幫助でも外部犯の犯行なんでもなく、予想通り単独による衝動的な殺人だった。熱が入ってきたのか、先程から自慢するようにどうやって矢を射たとか、矢が刺さってからもしばらくは生きていたとか、息を引き取る間に涙を流して自分に助けを求めたとか、俺の目と鼻の先で胸糞悪くなる話を延々としている。

誇張でも含まれているかとも思ったが、語っていることは真実だけだった。

『何を言うか、は思い通りに変えることが出来る。しかし、^{どう}言うか、をコントロールするのは困難だ。また、その際にボディランゲージとして表れる反応も、意識的にコントロールするのは難しい』

と、まあこれは完全に引用な訳だが、先日読んだ小説では、優秀な尋問専門の警察官が見事な話術と抜群の洞察力で容疑者の嘘を暴いていた。俺はまだまだその域までは辿り着いていないが、それでも、目の前の少年が意気揚々と話す殺人シーンに嘘が含まれていないことは分かる。

それが、ますます俺を苛立たせた。

現場に小細工をして、強姦目的のストーカーの犯行と思わせようとする所で、俺は少年の話を躊躇いなく遮った。

「^{Son of a bitch}分かった分かった。ああ、お前が畜生以下のクズだってことはよく分かった」

現実には推理小説とは違う。人が死んだのなら、必要なのはトリックを見破ることで、自分の推理を披露することでもない。もちろん、犯人と分かっている奴の戯言を聞くことでもない。

警察官に必要なのは、犯人を捕まえることだ。

「え？」

俺はあっけにとられ驚く少年の前で、スラックスのポケットから片手にすっぽり収まるサイズの金属の塊をゆっくりと取り出した。

「やれやれ。何を驚いてる？」

デリンジャー。上下二連銃身中折れ式拳銃。

かのリンカーン大統領を殺害したものと同一名前の銃。

そう、警察官に必要なのは……。

「ただの銃だろう」

俺が言うと、少年は自分の眉間にゆっくりと持ちあげられた黒い鉄塊を見て目を見開く。そしてうろたえたように叫んだ。

「な、何で!？」

その瞳孔はせわしなく左右に動き、空気を求めるように開いたり閉じたりしている口からすがる言葉がこぼれ出す。

「なあ、あんたには分かるだろう！ 完璧な姉の下に生まれたというだけで理不尽な待遇を強要され、陰口を叩かて、何をしても誰にも認めてもらえず、親からすら期待もされずに見捨てられる……誰だって姉を憎いと思うだろう!？」

「そうだな」

自分でも驚くほど冷徹な声が出た。

まるで自分のものではないかのような冷たい声。

「どんなに努力しても届かない。何をやっても比較される。この気持ち……あんたなら絶対に分かってくれると思ってい

たのに！」

「そうだな」。

少年は、黒い液体をテーブルに撒き散らしながら片手で顔を覆う。

「やめろ！」

俺は片手で重さ十キロの引き金を絞っていく。強く。

「あんただって目を逸らしただろ！？」

少年が言った。

ピクリと引き金に掛けた人差し指が震えた。

「俺にはあんたの気持ちが分かる！ あんたには俺の気持ちが全部分かってる。それなのに全部一方的に俺に押し付けて、自分は知らんぷりでヒーロー気取りか！？」

唾を吐き散らし、コーヒーを、椅子を倒して大声でわめきたてる少年。

そばかすだらけの、劣等感の塊。

そんな少年の姿が、初めて可哀想に見えた。

同時に、悲しくなった。

「やれやれ。全部なんて分からないさ」

渦巻く感情を押し殺し、努めて冷静に俺は言う。

「お前と俺は、例えるならコインの表と裏だ。だが……、」

一拍おいて、臓腑の底からせり上がってくる怒りと哀れみを一息に飲み込んでから、俺はもう一度少年に向き合った

。

「お前は姉を殺した。それは、紛れも無く『罪』だ」

言葉にしたことで、迷いがすうっと消えていく。

体が楽になる。

支配権を譲り渡した王の気分だ。晴れ晴れとして、清々しい。

「『罪』は『罰』でしか償えない。」

「止めなかったくせに！ 現実から逃げ出したくせに！」

少年の言葉のナイフは、的確に俺の内側をえぐる。

痛い。だが、それは目の前の哀れな少年も同じだろう。

「はあっ、はあっ！ ……なあ、考え直さないか？ 僕達はコインの表と裏なんだろう？ なら僕の罪は、あんたの罪でもあるんじゃないのか？」

引き攣る頬を焦燥と恐怖で歪め、円く穿たれた上下二つの銃身の先端を見ながら少年は必死に乞う。

だが銃口は揺らがない。

とっくにその覚悟は出来ているのだ。

あとは、少年だけだ。

「……そうだな。俺も一緒に『罰』を受けなきゃならないな」

言葉では懐柔出来ないと感じたのか、少年は視線を泳がせ、俺からの逃げ道を探す。俺はその視線を阻むように身を乗り出し、くしゃくしゃになった笑顔で少年に伝えた。

「もう、俺にも止められない」

初めて、嘘偽りのない、二つに割れた心全てからの笑みを浮かべられた。

「——っ！ あ、あんな人間死んで当然なんだよ！ そうさ！ 誰だって——」

「悪いな、」

最期の言葉を遮り、今度こそ俺は躊躇いなく引き金を引いた。

息を呑む声が聞こえた。

表と裏——。

「俺は好きだったよ」

——だからアメリア、君が第一発見者だった訳か。

「ええ。私が警察を呼んだの、明らかに即死だったから……本物を、ね」

——本物？ 彼は正式な警察官じゃなかったのかい？

「……彼は最期にお姉さんを殺した自分自身と決着をつけることにしたのね。その為に、私に鏡を持ってこさせたんだわ」

——一体どういうことだい？ 分かるように説明してくれ。

「ごめんなさい。でも、そのままの意味よ。……彼は出会った時からずっと一人だったの。食堂でも私を入れて、二人。コーヒーも二人分。他には誰もいないわ」

——つまり、少年との尋問は芝居だったってことかい？ 自分で鏡の中の自分に向かって尋問するふりをしていたと？ 何でまた……。

「いいえ。あれは絶対に演技なんかじゃなかったわ。私には分かるの。問う側も、鏡の中で問われる側も……それぞれがしっかりとした一人の人格だった」

——多重人格……まさか。

「恐らくはね。ここからは私の予想だけど、お姉さんを嫌いだった自分がいるように、お姉さんが好きで、憧れていた自分もちゃんといたのよ、きっと」

——驚いたな。鏡に映したもう一人の自分が犯人だったってことか。

「だから、彼は自分自身が許せなかった」

——なんてこった。
(Oh my god!)

「本当にね」

——そして皮肉だ、自分に殺意を覚えるなんて。それこそただの自殺じゃないか。

「いいえ。彼は大好きなお姉さんを殺した犯人に、自分の手でとどめを刺したのよ」

——分からないな。どう違うんだい？ 犯人が自分の半身なら姉を——それに自分を殺すなんてこと、止めることも出来たはずじゃないか……同じ体なんだから。

「本当に分からないの？」

——ああ、分からな……いや、もしかしたらどちらの人格にも、実は共通の思いがあったのかな？ それが姉への殺意。

「ええ。彼の中にもお姉さんを殺したいほどに憎む衝動が存在していたのかもしれないわね」

——つまり、自分も同じ気持ちだったと？

「こうは考えられない？ 彼らは二人とも、完璧なお姉さんが憎くて憎くて、けれど……大好きでもあった。その矛盾がいつしか人格を二つに分けた。でも人格が別れても、根っこの部分にあるお姉さんへの愛憎は分かれなかった。まるでコインの裏表のように——」

——なるほど。だから彼は姉殺しを止められなかった。あくまで推測だけど、筋は通るね。

「カット&ペーストではなく、コピー&ペーストだったというところかしら。あとは、自分殺し、の方だけど、こっちも同じにしては彼らの会話はちょっと奇妙だったように思えるんだけど……」

——姉殺しという大罪を犯した マイヤーズ 彼 彼自身 を、ブギーマン ブギーマンは赦してはくれなかった。

「それって『ハロウィン』の？」

——伝説上の怪物さ。世界中のベッドの下やクローゼットの中において、悪い子はみんなブギーマン食べられてしまう。キングの短編の中にも、このブギーマンを主題とした小説があるんだ。

「家族をブギーマンに殺された男性が、精神科に助けを求める話よね？ 本、読むんじゃない」

——読まないとは一言も言っていないさ。

「酷い人」

——つまり、初めは自分を殺すつもりがなかった彼も、最期には自分の強い ブギーマン 罪悪感によって自分自身を撃ち殺さなければいけなくなった。

「というと？」

——姉殺しの罪の意識から、自分を殺そうとする三人目の人格が生まれてもおかしくはないってことさ。

「！」

——実際に心が不安定だから二人目の人格が生まれた訳だし、何より、ブギーマンはどこからでも悪い子を見ているからね。

「私の家にもいるのかしら」

——さあ？ でも、クローゼットの中にチャック・ノリスがいるなら大丈夫じゃないかな。

「ふふ、そうね。今度呼んでくるわ」

——でもアメリア、彼は君に似ている。

「……ええ。彼も私と同じ、底無し沼に肩までどっぷりと浸かっていた人だった」

——もがいてもがいて、けれど体はどんどん沈んでいく。

「その内に思うのよ。どうせ何をして沈むのなら、もうもがくのをやめよう」

——代わりに、一緒に沈んでくれる相手を作ろう。

「一人で沈むのは怖いから」

——二人で手を繋いで沈んでいこう。……ああ、そういうことか。

「彼も怖かったのかしら？」

——かもしれないね。彼はいつも成績優秀でスポーツ万能、学校中の人気者であるお姉さんの影に生きてきた。いつもいつも、『優秀なお姉さんの弟』としてしか見てもらえない。

「毎日トレーニングをしたり、やけに本に詳しくたのも、何か一つでもお姉さんを越えたいから？」

——どうだろう、そこまでは分からない。他人が語る仮説は、所詮どこまでいっても仮説でしかないさ。

「どこまで記憶や体を共有していたのかは分からない。彼の半分……いえ、何人の人格が存在していたかも分からない。けれど、彼らは自分より優れた姉という存在を受け入れられなかった……自分という存在の^{アイデンティティ}意味を認められなかった。だから殺意に流された」

——アメリア。これ以上憶測だけで語っていても仕方がないよ。

「ごめんなさい、分かったわ。……でも、これだけは聞かせて」

——なんだい？

「あの人は解放されたと思う？」

——この場合の『あの人』が誰を指すのかは聞かないけれど、一つの肉体に押し込められていたのが複数の人格……魂だと定義するのなら、器に縛られなくなった『あの人』は解放されたんじゃないかな。

「もし……もし、よ？ 彼が凶行に手を染める前に、お姉さんとちゃんと対話出来ていたのなら——」

——『ハンプティ・ダンプティ』。アメリア、一度割れた卵は、もう元には戻らないよ。

「残酷ね」

——運命って奴は、大概残酷なものさ。あるいは、裏でその糸を引く神様が残酷なのかな？ どちらでもいいけれど、そろそろ大学に行く時間だよ。忘れ物はない？

「……ねえ」

——なんだい？ アメリア。

「私があなたの大切な人を殺したら、あなたは私と一緒に沈んでくれる？ ……それともブギーマンになって私を殺す？」

——さあね。それは鏡に映った君自身の心にでも聞いたらいんじゃないかな？

いつだって、コマドリを殺すのは、^{僕を生んだのは君自身なのだから}雀の役目なのだからね。

頂きプロット

- 起 1. あるひとつの殺意の発露について（誰がこまどり殺したの？）
- 承 2. あるひとつの殺意の違う発露について
- 承 3. あるひとつの殺意のさらに別の発露について
- 転結 4. 実際に起きた事件の概要、犯人、動機+結末（誰がこまどり殺したの？）

1～3（起承）で400字詰30枚とかで（設定次第で超えるかも）
たぶん合計50枚以内（前半で30枚大幅超えると少し厳しいか。ただ100枚以内なので余裕あり）

主人公は『雀』か『こまどり』か（男か女か？ 年齢は10代がベストか←若すぎ？）
狂言回し（トリックスター？ 部外者？ 探偵役？←男か女か。主人公による）
全部で6人以内（ずっと同じ場所で展開させるので増やしても邪魔になる）

不思議の国のアリス、マザーグース、妖精物語

大人でもなく子供でもなく、抑圧と解放、混乱から秩序へ

デカルコマニー、コラージュ、色違い、似て非なるもの

ミステリ的である必要はなくファンタジーでもなく、ただ殺意について

軽度の怪奇趣味？（ゴシック？ バロック？ 隠し味程度に。それが主眼ではない）

雀の殺意とその発露に起こる揺らぎ、思い描く度に変容するイメージのような（何それ？）

「現実是想定の通りには進んでくれない」「運命の糸は神にさえ残酷だと言う」